

北の湖の死去

横綱は強い。幕下相手に 100 回稽古して、1 度も負けない。

アメリカ巡業に際し、横綱が腕組みをして土俵中央に立っている。この相手にプロのアメリカンフットボールのタックルの選手がぶち当たっていく。ずるずると下がるが、俵に足がかかると、それからはピクリとも動かない。……その横綱は誰や？よ尋ねると北の湖です。これで信頼度がグッと増す。千代の富士あたりならふっとばされそうな感じである。

もう時効になりそうだから書いてもいいと思うのだが、大鵬が全盛期を過ぎた頃、弟弟子の玉の島が横綱になった。いろいろあったらしく、玉の海に四股名を変えた。しばらくして虫垂炎になった。大阪のある病院で手術したのだが、心不全か心筋梗塞かで急死した。力士の身体は、若くても動脈硬化症がひどく、老人と変わらないくらいである。無理矢理太るからである。

ところで、虫垂といえば、腹部のやや端になる。ここでの筋肉の厚さが 6cm あったという。おなかの中央部の筋肉の厚さはどのくらいになるだろうか。さわったらカチカチに硬い。20cm くらいあるのだろうか。

60 歳になると、還暦土俵入りをおこなうが、10 人もいるだろうか。

大鵬は、強いというより負けない力士だった。強いというなら柏戸や北の湖だろう。憎らしいほど強かったがなあ。

北の湖は、10 年近く横綱を勤め、休場しなかった。同世代に貴乃花や輪島がいる。貴乃花は、有望な水泳の選手だったが、水泳ではメシが食えない、と相撲に鞍替えした。小さな身体で精一杯頑張ったが、ついに横綱にはなれなかった。この人もなかなか休場しなかったが、休場したとき、暗に北の湖を指して、俺より大変な人がある。この人が休場したら、大相撲はどうなるか、と本気で心配していた。北の湖も満身創痕だったのである。

北の湖はおとなしく、まあ優等生だった。ついに耐え切れず 2~3 場所休場したとき、あるタニマチが料亭に連れて行った。すると、仲居が「なぜ出場しないのか」と責める。しばらくはだまっていたが、再三繰り返すから、「一度や二度は飯を食わせてくれる人はいる。俺にも生活がある。無理をして出場して再起不能になったら、誰が妻子の面倒をみてるのか！」……仲居はさすがに沈黙した。

輪島とは優勝争いを繰り返し、あるとき力が逆転した。それから北の湖のほうから声をかけるようになったという。

輪島は、プロレスに行ってみたり、かなり粗雑な感じの生活をした人だが、ボクの好きな話がある。

あるとき、タニマチが輪島や付け人を招待してくれた。当然、小遣いをくれる。力士は、親指と人差し指でつまんでその金額を調べる。100万とか300万とか。このとき、封筒の厚さしかないタニマチだったので、「こんなケチンボウなタニマチの相手をするのがいやだ」と、トイレに行く振りをして帰ってしまった。で、途中で念のため封筒を改めると、額面1000万円の小切手だった。すると輪島は、自慢のリンカーンコンチネンタルを慌ててUターンさせて、接待の席に戻った。いかにも輪島らしい話である。

2015.11.